

佐々木正美 子育て講演会「優しい気持ちになりたい」

この講演は佐々木正美先生が名東福祉会の地域福祉フォーラムの記念後援でお話になられた内容を収録したものです。

社会福祉法人 名東福祉会 地域フォーラム

平成 18 年 4 月 19 日 (水) 10:00 ~ 12:00

日進市民会館 大ホール

来場者：約 1,000 名

みなさん、おはようございます。ご紹介いただきました、佐々木正美です。主催者の方から「優しい心、優しい気持ち」という意味合いでの主題をいただきました。私、今、川崎総合医療福祉大学という倉敷にあります、保健・医療・福祉の総合大学で仕事をしておりますが、大学ができて 16 年目くらいでありますか、若い大学であります。それでも、保健と医療と福祉という領域の総合大学としては日本で最初の大学でなんであります。若い新しい気持ちに燃えた大学でございまして、大学の歌、いわゆる校歌ってものがありますね、二つございまして、卒業式に、あるいは、もう一つは、入学式にピッタリした歌なんであります、その作詞作曲が「さだまさし」さんであります。新しい、いかにも新しい大学のような気持ちがありますが、その歌の中に「優しい事は強き事」という言葉が繰り返されます。優しさってというのは、強さの裏返し表現でもあるということ、自分の至らない気持ちなども見つめながらよく思います。

横浜でも倉敷でもその他各地で、私は主にお母さんを対象にした勉強会を毎月繰り返しやっておりますが、そのお母さん達に子供を育てる日々の中で、例えばでございますが、「一週間でいいですから、一度も叱らないで育児をしてみてください！たった一週間の事でございますよ！何ヶ月も何年も申し上げているのではないんであります。たった一週間でいいから一度も叱らないで子育てになってみて下さい。」とこういう事をお願いする事があります。そして月に一回くらいの勉強会ですから翌月お会いした時に「一週間、一度も叱らないでおいでになられた方？」と伺ってみますと、本当に大勢お集まりになるお母さんの中で、お一人かお二人しかおいでにならないんです。叱らないでいられないようです。叱らないでいられないようでありますね。で、そういうふうに言われてみて、意識してみますと、実際は子供の為に叱ってるんじゃないんだっていうのがわかりますね。自分の気持ちが済まないから腹を立てて怒ってらっしゃる！という訳であります。要するに弱いんであります。私にもそういう弱さが沢山あるって事を承知の上で、自分の事を棚に上げてお話するのであります、叱らないでいるって事は弱い人にはできません。ですから弱い人は沢山愛情をもらわないと、強い人になれませんから、周りの人から愛される様に日々生きていかなければいけない訳であります。今日はいろんな方がお見えでしょうけど、お母さんが比較的多くお集まりかなというふうに思いますね。お母さんの方から申しますと、ご主人から沢山愛されますと優しいお母さんになれます。ご主人の愛情が足りないと思ってる人は子供を沢山叱ってらっしゃいます。で、叱る度にポイントがちゃんと増えていく様なメーターがありましたら、本当によろしいなと思ったり致します(笑)。優しく居られるって事は強い人であります。

人を信じること、人から信じられること

近年、脳科学者の研究でとりわけ川島隆太さん、時の人の様に著名な方がいらっしゃいますが、「前頭前野」って、ですね、人間にだけ特別に発達が大きく与えられている、脳の前の部分であります、その機能が、働きがよく発達してまいりますと、私達は、感情、衝動、欲望という事を自制する力が与えられます。その機能がよく働きますと、私達は、感情、衝動、欲望などの自制ができにくくなります。で、その部分はどのようにして育てられるか、どのようにして機能が働くようになるかっていうと、よい人間関係ですね。本当は「子供の時から、よい人間関係による」というところもあるわけでありまして。ま、こんな事をちょっと前置きしながら、お話を進めて行きたいと思えます。

「私達は子供を育てる時に、どんな所に基本的なポイントを置くべきか」、たぶん様々な人が、専門家が、様々な意見をお持ちでしょうけれども、私自身は、こう思いますね。「子供が自分で自分の事を好きになれる子供に育てたい！」

自分の事を好きになれる子供です。皆さん、お子さんをお持ちだと思いますね。お母さんお父さん方は自分のお子さん、学校の先生がおいでになるとしますと、学校の生徒さん。「その子供達一人一人がどれだけ自分の事を好きになっているか、こういう所もちょっと気遣いをさせていただくと思います。自分が自分で自分の事が好きになれるというのは、非常に生きていきやすいです。そして友達のを好きになれる。周囲の人の事を好きになれる。自分の事を好きになれるければ、人の事を好きにはなれません。これはとても重要なところであります。ですから、自分の事が好きになれる様にお子さんをお育てになれば、いい訳です。

その事は、同時に実は、その子の事を好きになってあげる人がいるという事です。実際に子供は、誰から自分の事を好きになって欲しいと思っているかといいますと、一番は多分「お母さん」からです。一部の例外的な子供もいるかもしれませんが、ほとんど大多数大部分の子供達は、お母さんから好きになってもらいたいんです。お母さんから「あなたの事が、大好きだ！大好きだ！」というも言われながら子供が育ちますと、自分の事を好きになれる子に育ちます。そして、お母さんの事を、当然好きになります。更に、友達や先生や自分を取り巻いている様々な人に対して基本的には好きになっていける訳です。この事は、生きていく上で非常に重要な事です。人を好きになりながら生きるという事です。これが「自信」でありますね。「好き」という言葉以外にこういう表現をするといたしますと、「人を信じる事が出来ますか？」「自分を信じる事が出来ますか？」こういうふうに言い替えてもいいと思います。「自分の事を信じる事ができる子供に育ててあげたい！」なにが出来る、できない関係なく！であります。何かがよく出来るから、何かがよく出来ないから、というふうなことではなくて、そういう事を越えて基本的なところで自分を信じて生きていく事ができるか。

でもこれはですね、自分を信じる力というのは、実は人を信じる力、これと表裏一体となって発達してくる感情です。そういう事を、まあ、エリクソンという人が長い臨床経験を通じて私達に教えてくれました。人間というものは、本当に不思議だなあとありますが、いつも他者との関係の中で生きていく訳ですが、その他者との関係がゆがんでくれば、自分の人格がゆがむという事になります。「人を信じる事が出来る人だけが、自分を信じる事ができる」訳であります。よろしゅうございましょうか？ さっき、市長さんのお話を伺っていて、「日進市は日本で有数の住みやすい町です。いい町を作っている、皆さんが！」という事を胸をはっておっしゃいました。市長さんの本当に静かな誇り、自信を私は、舞台の袖で感じさせていただきました。市民から、圧倒的多くの信頼を得てらっしゃる。人から信じられる事によって、人は自分を信じる事が出来る訳です。そして、市長さんは市民を信じてらっしゃる。人間関係ってこういうものですね。夫と妻を考えてごらんになったら、すぐにお分かりになるでしょう。親友ってというのは、そういう事でしょう。で、そういう人間関係をいっぱい持つ事が実は自分を信じて生きていける、自分の事を好きに思いながら、生きていける訳です。で、何かが良く出来ると、人間は自信を持つかということ、そんな事はありません。良く出来る様になった事が、例えばですね、大切な人からいい評価を得たり、賞賛を得たり、同意を得たり、好意が得られる、という事になれば、それは自分の自信になってきます。

精神科の治療は人間関係の再調整を行うこと

だけど、とても悲しい事ではありますが、近年、学校などで、友達より勉強ができる様になって、それが本当の自分の生きる自信になるかっていうと、そういう事にはならない場合が非常に沢山あります。しばしば、仲間内の嫉妬や羨望に出会ってしまう、という様な事が起こりがちな風潮が、わが国にはあるんですね。悲しい事です。「○○ちゃん、算数よくできてすごいね！いいね、教えてよ！」「宿題を手伝ってよ！」というような事を、小学校時代から仲間とやり合えばですよ、それは算数ができるっていう事が自信になります。自分を肯定する感情になります。こんなふうにならない様な育て方をしてらっしゃったら、何が出来ても、実はダメなんです。皆さんご存知かどうか、残念で悲しいことですけど、大学で今日、入学偏差値が高い大学の学生ほど自殺ないし自殺未遂率が高いんです。入学偏差値の高い大学に入る事が、生きる希望、意欲につながる。こういう人も大勢いらっしゃいましょうが、そんな事と全く関係のない人も非常に多いんです。悲しい事でもあります。

一昨年の事でありましたが、茨城大学の学生保健センターのスタッフの人達が、全国の大学の学生の自殺ないし自殺未遂の率とでもいいでしょうか、それをお調べになりました。学生対自殺者（未遂も含めて）、学生の数対自殺者の数というものの比率をお調べになりました。日本中の大学での広範な調査で、一番自殺者が多く出る学部っていう

のは、何学部の学生が一番自殺しやすいというふうに皆さんはご覧になりましょう。昔なら哲学だったかもしれませんがね。考えすぎてノイローゼになった。今、ノイローゼになるほど考える人なんていません、たぶん（笑）。一番自殺者が多い学部は、医学部であります。人の命を一番大切にするという事を考える進路、学問です。実践の領域です。それを目指す学生が、自殺者が多い。とういことでもあります。人間という事を考えているんじゃないんですね。入学試験を考えているのであります。不幸な事です。日本の風潮であります。ちなみに申しますと、2番目は、歯学部だそうです。歯医者さんの領域ですね。なんという事だと、日本という国は。子供の教育があきらかに歪んでいます。いつどのように歪んだのか、あるいは、どのように私達は歪まない育児教育ができるか、という様な事などを私の知恵の及ぶ限りお話してみたいと、こう思います。で、私自身は精神科の医者であります。自殺しないでやってまいりました（笑・笑）。

精神科の医者である私が尊敬申し上げている精神科の医師達は、古今東西大勢おりますが、その中の一人、ハリースタックサリバンっていう人がいます。いましたっていうのが正しいですね。1949年に亡くなっています。20世紀の前半に活躍したアメリカの精神科の医者です。自らの研究とか著作とか、そういう事にはあまり関心を示さない。で、文字通り生きがいの人道的な医療に身をささげた人だというふうには私は思います。で、死後、彼の著作にあたる物が、あいついで公表されましたが、それは、生前に語った物です。講演もしていますし、大学で講義もしています。仲間たちとたくさん語った事があります。すばらしい事を語ったんでしょうね、彼は。沢山録音されている訳です。それを後世の人がテープ起こしをして、書物にしたのであります。そういう中、そういう事を通じて、それからサリバンを知っている人々の思い出を通じて、サリバンが最もよく口にした言葉は、こういう事だそうです。

「人間は、この世に生まれてきたからには、誰もが存在する意味を持っているはずで。同時に、生きていく価値を持っているはずで。人間はそういう意味や価値を、一人一人みんなもっているはずですけども、そういう意味や価値は、私達人間は人間関係の中に見出していくんです。時には人間関係を通してしか実感できません。」こういうふうに言いました。

「心を病んだ人は、精神障害の人は一人残らず例外なく、人間関係の障害を持っているひと、あるいは、人間関係を失っている人、見失っているひとです。」ですから、精神医療、精神科方面の治療的な対応というのは、究極の目的は、すべて「その人の、人間関係をよい人間関係を再調整する事なんです。」見事な表現だと思います。

赤ちゃんと一緒に居る幸せ

みなさん、人間関係を大切に生きてらっしゃいますか？ご夫婦でいかがでしょう？親子でいかがでしょう？ご近所の人々と、いかがでしょう？例えばこういう事です。人間関係を粗末にするという事は、自分の人生を粗末にする事。自分の意味や価値を粗末にないがしろにする事でもあります。その人間関係という事について、私は大変尊敬するお二人の指導者に恵まれました。お一人はレオ・カナーという自閉症の専門家の後継者と言ってもよいマクターゲット教授、そしてあのアイデンティティーとかモラトリアムという概念、言葉でたいへん有名なエリクソンの親友でいらっしゃるカールクライン教授です。

カールクライン教授は、エリクソンの事を沢山教えてくれました。エリクソンは、こういう事を言ったそうです。「人間関係は、誰と誰の関係であっても、良い関係になればなる程、与えている物と、相手から与えられているものが、双方で等しい価値を認識しあっているものです。」これは、すばらしい言葉・表現でしょう。皆さんも、どなたかと皆さんが、お与えになっている物と、相手から皆さんが受けていらっしゃる、与えられているものが、等しい価値を持ち合っているような人間関係をお持ちでしょう。多分ご夫婦はそうでありましょうね。与えているもの、与えられているものの内容は違います。だけど、価値が等しいのであります。そういう時に、ご夫婦は良い関係であると言えますね。エリクソンはこんな例を沢山あげました。お母さんが、自分の生んだ赤ちゃんと幼な子と、別に幼な子である必要はなく、大きくなった子供でも、もちろんよろしいんですが、比喩的にエリクソンは、「自分が産んだ赤ちゃんと一緒に居る事をお母さんが幸福に感じる事ができたら、赤ちゃんはお母さんと居る事が幸福です。」こんなわかり易い例はないですね。

近年、私達は育児不安、育児ストレス、育児への嫌悪感を、拒否感を表現する様な風潮、文化を作ってきました。誰が作ったんですか？私達夫婦は子供を育てる事が、ストレスだとか、不安だとか思った事はないですよ。きれいごとを申し上げているんじゃないです。子供が側に居る事が大変幸せでした。だから、私の子供は親と居る事が幸せであってくれたろう、と思っています。親が幸せなんです。子供と一緒に居る事が不安です、ストレスです、自分のやりたい事ができないから不愉快ですと、こういうふうに親が思ったら、それに応じて当然、子供もその親と一緒に居る事が不安です、ストレスです、不快です。人間関係は片方だけが幸せだなんて関係はないんです。そうですね。そうでしょう。双方が、与える者と与えられている者が等しい価値を持っている、というふうな認識が双方で成立している時に、その人間関係は最高なんです。

生徒から学ぶ事ができる教師だけが本当に教える事ができます。つくづくそうだと思います。そういう事は、皆さん大体の方は中学時代でしょうか、英語の時間に学びましたね。「TO TEACH IS TO LEARN」「TEACHING IS LEARNING」教える事は、学ぶ事です。ただ、そういう時に英語だけを見ていましたから、その言葉の裏にある真髓って言ってもいい様なものを私達は見過ごしてきたかもしれませんが、近年、エリクソンに指摘されて、また改めて、しみじみその事を思います。患者さんから与えられているものの恩恵に感謝をすることができる治療者だけが、患者さんから感謝されるような治療が可能。エリクソンは精神分析家です。治療者です。強く、そういう事を実感したんでしょうね。「自分が目の前にいる患者さんから与えられているものに感謝ができる時に、相手から感謝される様な治療が可能なんだと思う。」とエリクソンは表現しています。

「健康な個人主義」と「利己主義」

ご夫婦が、親子が、近隣がこういう人間関係を持ちながら生きる事ができたら、すばらしいなあと思いますし、むしろ、そうでなければいけないと思います。私達は、戦後60年、自分を大切にしていきたいんです、という事を強く意識しながら生きてきました。とてもいい思想です。私自身、昨年70歳、古希を迎えました。今年71歳になります。戦争に負けた時に10歳でございました。確かに戦後60年経ちました。自分が70歳になりましたから、よくわかります。いろんな時代を生きてきました。第二次世界大戦中に私達は、自分を大切に生きていくという事が、なかなか出来にくかったろうと思います。自分の事よりお国の為にとという時代の恐ろしさを知っている人は、国の為にと、というような教育基本法改正に対して、神経質になれるだろうと思います。いろんな程度に、ですね。良い悪いを申し上げている訳ではないんですが、自分を大切に生きていくというのが出来なかったのは事実です。女性の方も、男性より生きにくかった時代です。封建時代の名残の中で、昔よく「長男の嫁」なんていう象徴的な表現をされました。財産は、親の財産は長男だけが引き継いだんです。そして、引き継ぎの分け前に長男のお嫁さんは授かったんです。けれども、その為の束縛、がんじがらめ、大変だったと思います。「長男の嫁」っていうのは、「生き辛さ」っていうことを象徴する様な表現としてよく言われました。あの時代、自分を大切に、っていう様な生き方はできませんでした。ですから、自分を大切に生きていくっていう健康な個人主義を戦後、私達は目指して生きてきました。良い文化だと、私は思います。「自己実現」というような表現があります。一度きりの人生、自分の人生を大切に生きましょう。ところが、「健康な個人主義」が、いつの間にか、豊かさや自由と平和という長い年月の中で、いつの間にか「健康な個人主義」が、不健康な「利己主義」「自己中心主義」になってきたと思います。そうである人、そうでない人、様々いるんです。様々いらっしゃる人々の中で、全体的な流れとしては、「利己主義」「個人主義」「自己中心主義」・・・「個人主義」と「利己主義」との区別がつかなくなる。「自分勝手主義」が、「健康な個人主義」と区別がつかなくなるっていうふうになってまいりました。そういう事を私達は意識しないといけないのだろうと思います。

私達は、今、世界一の長寿が与えられました。今年のWHOの報告を聞きますと、女性の日本人女性は平均寿命が86歳になりましたね。世界一の長寿です。平均寿命が86歳です。86歳より前に亡くなりますと、日本では「早死に」って事になりますよ（笑）、「若死に」でございませぬ（笑）。平均までいかなかったという事でもあります。すごい国ですね（笑）。WHOの報告によりますと、平均寿命がまだ、30代っていう国もあります。一方の私達は80代です。女性の皆さんは86歳平均。男性も79歳が平均寿命になりました。男性は確か、世界第二位ぐらいですかね、今。でも男女合わせて日本は世界一の長寿です。長寿社会に命が与えられるということは、多分、たいへん恵ま

れた環境で日々暮しているという事であろうかと思えます。ある一面は少なくとも、ですね。恵まれない環境で、世界一長生きができるっていうほど、私達はしぶとい性格を、人格を持っている訳ではないと思うんです。じゃあ恵まれているから、それで幸せになりましたか？という、これは難しいところでもあります。世界一の長寿です。けれども、ついに、昨年からは日本は、世界一の少子国になりました。ご当地は、出生率が増えているというすばらしい地域です。けれども日本全体を平均いたしますと、世界一の少子国、その国の女性が生涯の間に産む子供の数が世界最少になりました。イタリアと並んでであります。一昨年までは、日本は世界第二位だったんです、小さいほうから。10年近く前までは日本は世界第3位でした。ところが、ついに昨年からはイタリアとちょうど並んで、世界一の少子国家を今、作ろうとしています。日本は世界一、子供を産まない人々の群れであります。そして、その人々が世界一長生きをするんであります。どういうことになりましょうか。世界一子供がいない国になろうとする中で、同時に世帯数に比例しますと、ペットの保有率は、多分、世界一だろうと、こう言われるんです。こっちは、多いんであります。で、そのペットに、犬や猫に血統証が付いたり、それに類した高価な犬や猫が日本ほどよく売れる国はないでしょう、と言われるんであります。どうでしょうか、そうかもしれないな、と思ったりします。何でしょう、この現象は。一方で数年前まで、日本では年間、保健所を通じて殺される犬と猫が60万匹、70万匹とこう言われてきました。ところが、昨年の新聞報道で拝見しますと、ついに100万匹になった。こちらは雑種であります。雑種の犬や猫は可愛くないんですか？高価な血統証が付いている様な犬や猫が可愛いんですか？どうして、そういう犬や猫を私達はそんなに持ちたいんですか？その辺りの感情としては、一口で申しますと、私達はほとんど「自己愛的」になってきたんですね。動物への愛ではないんです、本質は。もちろん、そういう人も沢山いらっしゃいますよ。動物への愛を持っていらっしゃる人も沢山いらっしゃいます。けれども、私が申し上げているのは、全体的な風潮です。私達の平均的な、全体的な傾向です。少子国、少子国といいますが、時々テレビで拝見しますね、お子さんが10人とか10人以上いらっしゃるご家族の健康そうな、テンヤワンヤぶりが。おもしろおかしく放映されたりいたします。そういう人もいらっしゃることは、いらっしゃるんです。3人も4人もお子さんがいらっしゃるお宅もあるでしょう。だけど、平均的に言いますと、世界で一番子供を産まない。世界で一番ペットを飼う。世界で一番高価な犬や猫がよく売れる国。簡単に申しますと、動物への愛の感情よりは、自分が癒される、慰められる為の、自己愛の対象ですよ、ペットは。ですから、犬の希望か、猫の希望かどうかわかりませんが、多分そうではないと思いますが、洋服を着せたり、何かしながら慰めを与えられていらっしゃる人がいる。多分、犬にしてみれば、迷惑でしょうね。洋服を着せられたりですね、帽子をかぶせられたり。先頃、でも、半年も前になりますが、私の自宅の近くにありますが、ペットショップを眺めていましたら、「犬にはかせる靴」っていうのが売ってありまして、驚きました、私は（笑）。「売れますか？こういうもの」って聞いてみたら、「まだ、一足も売れてないんです」っておっしゃった（笑）。「でも、必ず買う人がいる」と自信満々でした、お店の主は（笑）。犬の靴でございますから、一足っていうのは4つあるって事でございますよ（笑）。何の為に私達はこんな事をするのか・・・自分の癒しのためです。動物への愛ではないんです。だけど、こういう私達の生き様が子供にどの様に映るのか、という事でもあります。

幼い子どもたちから見た母親と父親像

今、保育園で、先程ご案内頂きました様に、私は保育士さんとの勉強会を毎週1回～3回くらい各地でやります。一度もないっていう週はないくらいです。夜であります、保育士さんと勉強会します。もう十何年も前から教えられてきた事です、自分も見せていただいた事ですが、子供たちが、ママごと遊びをする力が衰えてきました、下手になりました、できにくくなりました。一番の理由はですね、皆さん、女の子がお母さん役を引き受けてくれなくなってしまったんです。本当ですよ。ご当地、日進市は違うかもしれませんが、両隣の市に行って伺ってみて下さい。両隣の市がダメだと申し上げているんじゃないかもしれませんが、保育園の保育士さんに聞いてみていただきたい。今、この中においてになりましょうか？「お母さんをやってくれる人？」と言って、勇んで「ハイッ！」って手をあげてくれる子はほとんどいなくなりました。かつて、ママごと遊びをする時に女の子全てが、お母さんをやりたがったんです。ほぼ全ての子供が。「私に、お母さんやらせて！お母さんやらせて！」こう言ったんです。今は大多数、ほぼ全てに近い子供が、「お母さんだけはイヤだ！」と言いますよ。本当なんです。大変な事です。保育士さんが「〇〇ちゃ

ん、今日だけでいいから、お母さんやって下さい。」とお願いするんです。「先生、本当に今日だけだからね！」(笑) 子供は可愛いですよ。思った事を思ったとおり。「先生、本当に今日だけだよ！」「いいですよ、今日だけで。」「それじゃあ、もう、卒園するまで、しない！指きりげんまんして下さい」(笑) 恩に着せてお母さん役をやってくれます。そのお母さん役を引き受けた子供はですね、遊んでいる間中、ずっとほかの家族のメンバーに指示や命令ばかりしているようであります(笑)。わかりますか？(笑) どうぞ、皆さんね、いろいろお考え下さい。それじゃあ、男の子はお父さん役を上手にできますか？という、これがなかなかできません。ある子をお父さん役をお願いして、「さあ、遊びを始めましょう。」と言っても、どう振舞っていいかわからなくて、ポーっと突っ立っているだけの子が居るんです。「お父さん、ほら、しっかりして下さい。」保育士さんが激励されます。そうすると、ただ、ウロウロウロウロするだけなんですね。「お父さんでしょう、動物園のクマさんじゃないでしょ！しっかりして下さい！」とこう言ったと。この前、横浜で聞いた話です。そうしたら、いきなり寝っころがってしまったが、で、どうするんだろうと思って見ていたら、一息ついて「お母さん、ビールを持って来て下さい」(笑) と、こう言ったのであります。「お父さん、何しているんですか？」と聞いてみた。そうしたら、「ナイター見えています」と、こう言ったって言うんです(笑)。先頃、倉敷ではこんな話も聞きました。ある子が、お父さん役に決まって、「さあ、遊びを始めましょう！」と思ったとたんに、その子はですね、「僕は、ゴルフに行ってきます！」と言っていなくなっちゃった(笑・笑)。みんな、これ本当のお話ですよ。でも、この辺まではまだまだってという語弊があるかもしれませんが、こんな話も聞きました。まだ、今は、よろしいと思うんですが、東京中野区の話です。私のある友人が、絵葉書をくれたんです。二枚綴りの絵葉書で、一枚で書ききれなくなったから、二枚目を書いた、とこういうふうな面白い絵葉書をくれました。東京中野の、もう、一年あまり前の話です。通学路で朝、子供に出会ったんです。何人かの子供が集団で登校していて、女の子のグループを見つけて、「皆さん、何年生？」って聞いたら「2年生！」とこう言いました。女の子達に「ママごと遊びしますか？」と聞いたら、「するよ！おじさん！」って言ったんです。あーできるんだ、とこう思ったんです。ついでに、聞いてみようと思った。「お母さん役を上手にできますか？」って聞いたら、「しません！」って言ったんです。「じゃあ、ママごと遊びできないじゃないですか？」と言うと、「おじさん、大丈夫だよ！お母さんが、死んじゃった家の遊びをするから！」(笑) すごいでしょう。これには、さすがに驚いたって、彼は。ご当地のお話ではありませんよ。東京中野区の話であります。でも、これは、東京中野の話だけではないって事がわかりました。今年の春先に実は私、ある東北地方の県に伺いました。「ある県」と申し上げておきます。保育士さんの大きな学習会でした。そこで、同じ様な話を聞きました。子供達が、ママごと遊びをしようという事になりました。保育士さんがお誘いになったかどうかわかりませんが「皆で、役を決めましょう。」とこう言っている。なかなか決まらない。やっぱり、お母さんの引き受け手がないんです。保育園のお話です。東北地方のお話です。なかなか、お母さん、引き受けてくれる子がいない。そうしましたら、ある子が手を上げて、こう言った。「お母さんは、入院していることにしよう！病院で！」こう言ったんです。「そうだ！そうだ！」とすぐ話がまとまったんだそうです。そして、ママごと遊びが始まった。実はこれはウソでも何でもないんですよ。誇張した話でも何でもないんですよ。そして、保育園の子供達のママごと遊びで一番人気のある役は「ペット」なんでございます。わかりますか？犬や猫を、皆、やりたがるんです。とても、愛されている様に見えるんでしょうね、子供から見ると。いつも、お父さんやお母さんの膝の上で、愛撫を受けて、大切にされて、「勉強しろ！ピアノのお稽古しろ！」などと言われなくて、ご飯をこぼしたからどうだとか、あーだとか言われなくて、「早くお風呂に入りなさい！」とか「テレビを見るのを止めなさい！」とか「寝なさい！」とか言われなくて、「生まれ変わったら、犬になりたい！」「今度生まれてきたら猫で生まれてきたい！」など思っている。本当は、こんなことでいいはずありませんよね。私達の生き様が、幼い子供達にこんなふう映っているんです。こんな気持ちでいるんです。「保育士さん達、もっとそういう事をしっかり社会に向けて言わなかったらダメでしょう。」と私は申し上げるんです。本当にそうですよ。「大きくなったら、お父さんみたいになりたい！」「お母さんみたいになりたい！」今は小さいから三輪車しか乗れない。大きくなったら、車の運転もできる。家族で旅行した時、新幹線だった。はやく大きくなって新幹線の運転手になりたい。こういうのが子供でしょ。「早く犬になりたい！」って言うんだから、どうしようもない！(笑)

友から学び、友に伝える

私達の優しさは、子供には、ペットにしか向って行ってないように感じられているんです。いろんな程度にね。そうである子とそうでない子といるでしょう。いると思いたいんです。だけど、全体的なこの流れは、とても大きいです。とても大きいですね。人間は、ペットとの関係ではなく、人間関係の中に自分の存在の意味や、価値を見出すんです。与える者と、与えられている者が等しい価値を持ち合っている様な生き方をしていく事によって、私達は人間らしく生きていく事ができるんです。この事の認識をしっかりともう一度したいと思うんです。子供達は、基本的に申しますと、学童期に、小学校時代の数年間に「将来の、社会的に勤勉に生きていく事ができるかどうか」ということ、基本的な資質、能力、人格の部分を作る」と、こう言われます。社会的に勤勉に生きていく事ができるかどうか、という事があります。で、それは、遊びの中で育ちます。エリクソンは、それを言いました。本当は、遊びの中で育つというよりも、もう少し学問的な言い回しをしますと、同時代の仲間との道具や知識の体験ということになります。それを仲間と共有しあう事。これによって、その時代の社会の中で、機能していく能力を身につけるんです。社会的に勤勉に生きていく為の基本的な力は、同時代の仲間との道具や知識の体験を共有しあう事、これが必須不可欠な事ですと、エリクソンは言いました。もう少し砕いた言葉で言えば、友達から学ぶ事です。そして、友達に、教える事です。私達は自分の子供を、どの様に育てているか。近年、不幸な風潮は「大人からしか学ばない」「大人からしか学べない」、こういう子供を私達は強く、大きく作ってしまった。これは私にしてみると、多少、取り返しがつかない間違えに思える事があります。「友達から学べない」んです。「友達から物を教えてもらえない」んです。先生からは学べるんです。そのほかに放課後、学習塾の大人や先生からも学べるんです。もしかしたら、親からも学んでいるんでしょう。でも、「仲間から学べない」んです。友達に物を教える経験と、友達から物を学ぶ経験、これが、社会的に勤勉に生きていく為の重要な資質を作るために不可欠な事」だとエリクソンは言いました。全くその通りだと思われませんか？ご年配の方々、昔、地域社会で独楽をまわしたり、鬼ごっこをしたり、陣取りをしたり、何をしたり、これをしてしながら遊んでいた時代の子供達というのは、大人になった時に皆、社会的に勤勉に働いているでしょう。働いたじゃないですか。団塊の世代の人の事だけ言うんではありません。友達と遊ぶというのは、私達からすると無駄に時間を過ごしている様にどうしても見えがちですが、実は違うんですね。

我が家でも、こんな小さなエピソードを思い出します。子供が小学校の高学年とか中学生とかになるにつれて、3人息子がおりますが、2階にそれぞれの部屋を与えました。子供達は、用がない時は自分の部屋に行って自分の好きな事をしているんだろうと思いますが、ある時、階段の下から、私の妻、母親が子供達に向かって「あんた達、遊んでばかりいないで、お手伝いしなさい！」こう言いました。そしたら、上から代表格のある息子がですね、「遊んでなんかいないよ」と、こう言ったんです。そしたら家内は、「じゃあ勉強しているの？」と、こう言ったんです。「勉強なんかしてないよ！」と、息子はこう言いました。「じゃあ、何をしてんのよ！」と母親。「何もしてないよ！」と息子・・・わかりますか？母親にしてみると、勉強してるか、お手伝い、奉仕をしているか以外の時間は全部遊びだって言うんです。でも、そうじゃないですよ。遊びというのは、立派な営みです。子供にとって大切な営みなんです。大人にとっての遊びも、それだって本当は、全部無駄とは思いませんが、「あの人は遊び人ですね。」なんて言われたら、もう、人格全体を否定されている様な事になってしまう。「遊び」という事に対して、悪いイメージを持ちすぎています、私達は。「友達と本当に遊ぶ」という事の意味が、どれくらい大切かって事を忘れてしています。先生や、その他の大人から学ぶことの価値や意味は大きいですよ。それを、どうでもいいと言っているんじゃないんです。だけど、人間が、子供達が将来、社会的に勤勉に生きていく為の人格を育てるという意味では、それはむしろ小さいんです。友達から学ぶ事、それ以上に友達に教える経験。学ぶ事と教える事の経験が、この総量が重要なんです。何を学ぶか、という事よりは、何を教えるかという事よりは、どれだけ友達から学んだか、どれだけ友達に伝えたか。この経験を抜きにしたら、社会的に勤勉に生きていく人格の基盤は育たないと思います。エリクソンの重要な指摘です。みなさん、どれだけ、ご自身のお子さんが仲間から物を学ぶ事、仲間から物を教える事を重要視して、育児をしてらっしゃいますか？

子どもどうしの遊びと社会性

私達が子供の頃、私達の親が、そのことが大切だからと思ってそうしたんじゃないんです。子供達は親の目の届かない所で、勝手にしていただけです。それは、地域社会があったからです。勉強、勉強という風潮がもつとなかった

からであります。別に昔の親が、賢く、偉く、子供に遊びが大切だよ、と説いたんじゃないんです。私は自分の親から、もっと遊ばなきゃ駄目なんて言われた事、一度もありません。それは確かにないですね。だけど、友達と自然に遊んでいた事が、こんなに意味があったということ、近年になって知る事になりました。そう意味を持ってですね、古今東西の優れた研究者の研究を様々な角度から紐解いてみます。例えば、ソビエトに、旧ソビエト時代に、世界的に高名な心理学者で、リモツキーっていう人がいました。リモツキーは、子供の遊びを研究しました。様々な事を研究しましたが、子供の遊びについても、とっても熱心に研究しました。「子供はなぜ遊ぶのか」という主題でもって、観察と研究に取り組み始めます。ところが研究を進めるうちに、すぐ主題っていいでしょうか、仮説っていいでしょうか、テーマを変えます。「子供はなぜ遊ばなければならないのか？」その事を切実に理解するんです。「子供はなぜ、遊ばなければならないのか？」こういう事なんです。「なぜか？」それを理解するために様々な、それぞれ無数にある遊びを、助手や同僚達と手分けをして、協力して、小さい子供から大きい青年の遊びまで、大きくなればスポーツの様な事が多くなりますが、遊びをたくさん観察していきます。そして、その意味を詳細に分析していきます。結論めいた所だけをご案内しますと、子供達は遊ぼうとする時は、必ずルールを作ります、規則を作ります。順番をどうするか、とか、こういう事はしちゃいけないとか、こうしなければいけないとか、必ずルールを作ります。それが、最も高度に分化したものがスポーツだと言いますが、本格的なスポーツを始める前の子供でも、遊ぶ時には、暗黙の了解事項も含めて、必ず規則を作るんです。で、その規則、ルールを守る事ができる子供だけが遊びに参加する資格を得ます。こんな堅苦しい事を言わなくても結果として、こうなっているんです。年齢の小さい子供も遊び仲間に入れてやる時には、このルールは、この小さい子には無理だと思うような事があつたら、ちゃんと言上の子供が例外規定を設けています、その子の為に。「○○ちゃんと○○ちゃんはこれでいいんです」という具合でありますね。自分の子供の頃を振り返ってみても、空き地で草野球などをする時に、私達は小さい仲間も入れながらやりました。子守をしながらでないと、遊びに出してもらえないという仲間がいる訳です。小さい子が居る訳ですね。そうすると、野球をする為に箸にも棒にもかからないほど小さい子、これは別ですが、ちょっと大きめの子の場合には特定のルールを作ったんです。「○○ちゃんと○○ちゃんは、三振なしだからね」こんな事を決めました。だからピッチャーは一生懸命、難しい球を投げて三振を取ろうとしたって無駄だよ。三振なしですから、空振りも永遠にしているいいんです。ですから、例えばですよ、むしろ打ち易い球を、そっと投げてあげて、打ってもらってアウトにしたほうがいい訳ですね。こんな風な事をやった思い出が沢山あります。とても野球に参加できないというほど、もっと小さい子供を連れてくる子も、仲間もいる訳です。するとその子は、子守をしなければいけないので、野球と一緒にやることで、結果として、皆で手分けをして子守をした訳です。子守は攻撃をする側がするんです。守りをする側は、守りながら子守はできないから、攻撃をする側が子守をする。こんな思い出が沢山あります。小さなルールです。水溜りにボールが入ったら困るとか様々な制約があるから、「あっちへ打ってしまったら、それだけでもう、スリーアウトです。」とかですね、そんな風に決めたり、「ここは、アウトを取るのが難しいグラウンドだけど、集まった人数が少なすぎるから、ツーアウトで交代にしよう」とか、三角ベースにするとか、その時、その時で様々なルールを工夫したもんです。必ずルールを作ります。そのルールを守れる子だけが遊びに参加する資格があるんです。

次に、必ず役割を分担しあうんです。子供の遊びを見ていると、必ず役割を分担している。例えば幼い子供が、砂場でお山を作って遊んでいると「僕はこっち側から穴を、トンネルを掘っていくからね。○○ちゃんは向こう側から掘ってね。」と役割を決める訳です。簡単にね。「この高さで掘って行かないと繋がらないよ。」「急いで掘りすぎると、せっかく作った砂山が崩れるから注意深く掘るんだよ。」こんな事を言葉で言うか、暗黙の了解事項にするか、必ずルールを作り、役割をこっち側と向こう側で決めるでしょう。大きくなれば電車ごっこをする。だれが運転手で、だれが車掌さんで、お客さんはどうで、駅員はどうでと、こういう事を決めていきます。役割を決めるんです。役割は必ず仲間の承認を得なければいけない。子供は快楽をただ求めて遊んでいるなんてことは絶対ありません。より困難な役割を引き受けたがりながら遊んでいるんです。「今日できない事は、明日できる様になりたい」「まだ、出来なかった事は、早く出来る様になりたい」「こういう役割を自分にもやらせてもらいたい」こういう事を思いながら、リモツキーは研究者ですから、研究報告書の中では、堅苦しい言葉を使っています。「子供は遊びながら、快楽を求めているんじゃないんです。単純に快楽を求めているんじゃないんです。発達方向に向った、最近接領域の事を早く達成したい！こう思って努力しながら遊んでいるんです。」こう言いました。快楽、興楽の為に遊んでいる子なんていないんです。なるほどと思います。発達方向に向った最近接領域の課題、という表現は難しいです。でも、意味は優しいですよ。

「今はできない、でも、もうすぐ出来そうな事」とこういう事でしょ。こう書いてくれば論文は読みやすいですよ。「まだ、できてないんです。だけど、もうすぐできそうに子供が思っている事」という風を書いて下すつたらね。実際は、発達方向に向った最近接領域の事をロシア語で書かれてしまう(笑)。まあ、多分、大変でしょうね。私は、それを英語に直した人の文章でそういうふうに読んだんです。野球に例えれば、より困難なピッチャーをやりたいと、どの子も思っているんでしょうね、きっと。それが許されなきゃ、じゃ、キャッチャーをとか、内野手をとか、どこを守りたい、とか、打順が一番を打ちたいとか、イチロー選手みたいに、とか思っているんでしょう。皆、努力をしているんです。だけど、仲間に「〇〇ちゃん、まだラストバッター」だと言われちゃう事もある訳です。

先ほども言いましたが、子どもたちはルールを作り、ルールを守るんです。役割を仲間の承認を得て分担するんです。そして、役割に伴った責任を果たす為に、最善の努力をするんです。出来る事なら、もっと困難な役割を担いたいと思っているんです。ですから、事がうまくいった時には、仲間と喜びを分かち合えるんです。だけど、失敗した、例えば大事なところでエラーをしてしまったとか、三振をしてしまったとか、いう事があっても、楽しく、一生懸命、夢中になって遊び合っている仲間は、そのことを攻めたりなんかしませんよ。見て御覧なさい、子供の遊びを。必ず慰められている。感動を、喜びを、また時には残念さや悲しみを分かち合っているでしょう。

人間が持つ、社会的な道徳性・倫理性というもの、すなわち社会的性というものは、こういう風な意味あいの遊びを通じて、子供は獲得していくんじゃないですか。「こういう事以上に、より効果的に子供達に社会性・・・倫理性、道徳性ってものを伴った社会性というものを身に付けさせる様な方法があったら、教えてもらいたい。」こういう主旨の事をリモッキーは言っています。「道徳の教科書を作って、しっかり学校の先生が生徒に講義をしたりすれば、子供達が、道徳観、倫理観豊かな子供に育つとか、社会性豊かな子供に育つとか、そんなことはないでしょう。」と。大切なのは、子供に主体性を与えるということです。遊んでいる子供が主体性をもってなければいけない。単に野球をやればいいんじゃないんです。監督やコーチが取り仕切りすぎているのも、ダメなんでありませぬ。甲子園に出るほど野球の技術が優れた学校で、どうしてあんな不幸な不祥事が起きるんですか？人格的には最低最悪と思える様な事をやってしまう様な生徒が出るでしょう。本当の意味でのスポーツマンシップ、フェアプレーの精神が身につく様な指導をされてないですね。プロ野球の選手につながる様な技術だけが教えられているという風に思わざるを得ない様なスポーツの教え方。大人だから、そうになってしまうんですね。子供同士、仲間同士だったら、もっといいんですよ。私達は、立派なユニフォームも、グローブもバットもない時代に遊びをしました。だけど、口うるさいコーチがいない所で、のびのび草野球を楽しめた。だから多分、様々なレベルでそれぞれが、ある種の社会性・・・道徳性・倫理性を持った社会性を身に付けながら、大きくなってきたと思います。私達は、子供達から、何を奪ってしまっているのか？悪意はありません。むしろ善意でという事は事実であります。だけど、こんな風に間違えてきました、という事をどっかで、やはり、見直す必要があるんじゃないでしょうか。私達が一生懸命育てている子供達のことですから、残念なのですが。

崩壊する親子関係

近年様々な研究団体、調査研究団体の人が若者の気持ちを、少年・青年達の気持ちを調査して、その研究報告書を公開して下さっていますので、少しご案内しようと思います。悲しい事ですが、私は、日本の少年少女達が親に対して抱いている感情、すなわち親子関係は、いろんな意味で世界最悪だと思っています。いろんな調査研究をじっくりここで、ご覧頂きたい位です。例えば、近年、日本青少年研究所の調査や研究報告はしばしば新聞などで取り上げられる様になりました。私は10年ぐらい前から、この研究所の方の調査研究報告を拝見する事が多くなりました。2年がかりで大きな調査をされている様に思います。西暦で言いますと、偶数年に様々な調査研究報告が報告されるんです。1996年分が、私としては、最初に拝見した調査研究報告です。日本と中国とアメリカ、それぞれ高校生を広く片寄りなく、2000名の無作為抽出をして、自分の親に対する気持ちをいろいろ尋ねました。日本の高校生、中国の高校生、アメリカの高校生です。いろんな事を聞いています。どれを取っても、よく似た様な結果になりますが、例えば、一つこういうのがあります。それぞれの国の高校生に向って、「将来、自分の両親が高齢になって、人の助けを得なければ生きていく事ができなくなった時、あなたは自分の両親を最善を尽くして支援しようという気持ちがありますか？」という問いかけがあります。最善を尽くすんです。かっこ書きで、どんな事をしてでも、とあります。

同じ様な事を、それぞれの国の言葉で聞かれた高校生たちの、「最善を尽くそうと、どんなことをしてでも親を応援しよう、援助しようと思います。」と答える高校生の比率が、中国は66%、3人に2人ですね。アメリカは46%です。半分までちょっといきませんでした。どんな事をしても、とまで言われると腰が引けるのかもしれませんが。一方の日本は16%です。私達が育てている様に育てているんだろうと思います。16%しかいません。2年後に、また沢山の事を同じ様に聞かれました。今度は、中国の代わりに、韓国を選びました。日本と韓国とアメリカの高校生であります。「あなたは、自分の両親の事を、非常に尊敬する事ができますか？」と、こういう尋ね方をした項目で「ハイ」と答える高校生はアメリカ、確か80%、韓国55%、日本は10%であります。「あなたが将来、結婚しようとする時に、何らかの事情があって、どちらかの両親と同居することが望ましいという風な状況があったと仮定して下さい。その時、あなたは、以下のどれを選びたいと思いますか？」という設問があります。5項目くらい選択肢があったと思いますが、その最後が「どんな事があっても、絶対いやです。」となっています。もう、お分かりになりましょう。日本の高校生が一番そこを選びます。どうして、こんなに、親子関係が不幸なことになっているか。いろんな意味で、ですよ。そうではない人も大勢いらしゃると思いますし、全てがこうだって事を申し上げているんじゃないんです。あくまで比率で申し上げているんです。

どうして、こんな風に不幸な事になったのでしょうか。子供から見て、親とペットの関係だけがよく見えるんでしょうか？昨年、全く別の研究団体の方が協力し合って、日本と韓国とフランスとアメリカの4つの国で、今度は中学生まで含めて調査をしました。最もその研究会の人が注目した、重要視した項目に「あなたは、自分の両親の事を誇りに思いますか？あなたは、自分の両親を誇れますか？」という設問があります。それに対して、「自分の両親の事を自分は誇りに思います。誇る事ができます。」と答える中高校生の比率であります。4つの国の中で、日本を除く3つの国の数字はほぼ一致しまして、70~80%の間なんだそうです。それに比べて、日本だけが40%であります。最長寿が与えられる様なゆたかなよい社会。ある種の住み易さ、生き易さでしょ。長生きが世界一できるんですから。もちろん、それに私達は満足しておらず、まだ、不満・不服が一杯あると思いますけども、そういう社会が持つ落とし穴みたいなものを感じますね。こんなに不幸な親子関係です。「子供がいてくれるから幸せです。」私達は心からそう思いながら子供を育て、教育をしていかなければいけないと思いますね。こうなってくれなければ幸せでない、っていう様なメッセージを与えちゃいけないんです、子供に。「こうなるんですよ」「こんな事ではいけませんよ」これは大いにお伝えなっているんです。だけど、「そうやって、あんたがなかなかそうやってくれないから、お母さん、お父さん、イラ立ったり、悲しんだり、辛いんだ」っていう風なメッセージを子供に与えるっていうのは、親として子供に大変失礼な事です。「こういう子供が欲しいんです」という気持ちは、私達に誰でもあります。それがペットであれば、「こういう犬が欲しいです」と言えば、すぐに手に入れる事ができます。ですが、子供は簡単にそうはいきません。「こういう子供が欲しいんです」という感情をもしお持ちだったら、「あなたは、どんな親が欲しいですか？」このぐらゐの事は静かに聞かかけながら育児をしていただかなくちゃ、子供に失礼じゃないでしょうか。先生方は生徒には「こうなれ」「あんなれ」とおっしゃいますが、生徒が先生にどうあって欲しいと思っているか、無視していらっしやる。いけない事でしょう、それは。だけど、私達は知らず知らずのうちに健康な個人主義を逸脱して、いろんな程度に個人差を持ちながら、自己中心的、利己主義的になってきて、その事実気が付かないでいる所があるんじゃないでしょうか。夫が妻に「こうなって欲しい」と言う。妻が夫に「こういう事に協力して、あんなって欲しい」と言う。対等ですよ。そのメジャーが上手に行き来している時に、良い夫婦でいらっしやる、ということが言えるんじゃないですか。親子も全く同じですよ。私達はそういうメッセージのやり取りを、ペットとしかできなくなってきたんじゃないでしょうか。そういう風な傾向が徐々に見られる。「あなたが居るから、私は癒されて、くつろげます。幸福です。」っていう事を、ペットに対して表現していらっしやる。そうでない方も大勢いらっしやる事を承知して申し上げています。是非、イメージして下さい。ペットに対して、こういうメッセージを伝えているのと同じ様に、子供に対してもイメージを抱いてあげていただきたい、メッセージを伝えてあげていただきたい、としみじみ思います。

私も子供の親であります。親の感情は皆さん、どなたとも同じものが共通してあります。自己愛的な気持ちで子供を育てます。「こういう子供が持ちたいんです。」「こういう学校に合格してくれる様な子供が欲しいんです。」「少年スポーツの中で主役を果たせる様な子供になって欲しいんです。」「勉強ができる子になって欲しいです。」「ピアノ、バイオリンが上手な子になって欲しいです。」などなどあるとします。だけど、それと同じ様な感情を子供も親に描

いているでしょう。そうでは、ありませんか？「せめて、もう少し美味しい食事を、毎食作ってくれる親になって欲しいです。」(笑) 例えば、であります。(笑) どうですか、皆さん。これは、比喩的な例を申し上げているんですが、最高の学校に入って欲しいと思われたら、最高の調理人を目指せますからね。何も食事だけがっていう事じゃないんです。象徴的に比喩的に申し上げているんですが、現代の子どもには、こちらの要求だけが多分沢山伝わり過ぎているんじゃないでしょうか。「それでいいよ、あんたは。十分だよ。」こういう風な気持ちを沢山与えながら育てて下されば、これが優しさですが、自己愛と違って、相手に対する愛であります。ペットの様にいきなり愛される様な、愛する事が出来る様な形、ペットショップですぐに手に入るような、そんなものではないですよ、子供の場合は。親にしか似ていない子供が産まれてきたんであります。そうでしょう。犬や猫は、他の犬や猫に似ている、犬や猫を飼っているんです。私達は、自分に似ている子供の方が、いいに決まっているじゃないですか。自分と夫に、自分と妻に似ている子供の方が。「こんな子供を産んだ覚えがない！」こんな無責任な・・・(笑)「こんな子供に育てた覚えがない！」こんな無責任な事はいけませんよね。一番いけないですね。

微笑みの交換

そういう中で大切な事、例えば、私自身が大変多くを学ぶ事があるアンディーワロンというフランスの心理学者が居ましたが、ご存知でしょうか。ピアジェとほぼ同じ様な時代を生きた人です。1800年代の終わりから1900年代の初めの方であります。ワロンを一言で言いますと、生涯をかけて、人間はどの様なプロセスを、過程を辿りながら、それぞれの自分を作り上げていくのか、見出していくのかを研究した方です。優れた研究というのは、みんな到達線が似ているなあと思います。エリクソンの言葉を借りれば、どのようにしてアイデンティティを形成していくか、こういう事になりますね。皆さん自分で納得のいく自分を作り上げて来られましたか。まだまだこれから何十年という歳月をかけて、もちろん、よろしいわけではありますが、人間はどの様にして自分を作り上げてくるのかと、こういう事です。ワロンが、生涯をかけて行った研究の結論はですね、他者があるから自己がある、相手があれこれあったから自分があるということです。わかり易い表現といえば、わかり易い表現です。明るさは、暗さを対象にして意味を持ちます。いろんな色は、他の色と比較の中で色の意味を持つ訳ですね。赤っていうのは、青や黄色がなかったら、赤一色の世界にいたら、私達は赤という色を自覚しないだろうと思いますが、これと同じように、他者がいなければ、自分はないんです。ワロンはこう言いました。「他者によって自己ができる」と。実際は、他者との交わりによってです。ですから、私達にとっては、子供達をどの様な他者と、どの様な交わりを与えながら、育て上げるか、という事が重要です。先ほども申し上げました、遊びなんかは典型的な例でありますね。でもワロンは、こういう面から説いていきました。赤ちゃんは産まれて、生後1、2ヶ月になりますと・・・1、2ヶ月のときの事を言われたってもう手遅れだ、なんて思わないで下さい。大きくなられてからだって、いいんですが・・・赤ちゃんは、生後1、2ヶ月になりますと、まだ首もすわらないほど未熟な赤ちゃんにお母さんが笑顔を与えてごらん下さい。赤ちゃんは、笑顔返してきますから。これを微笑みの交換と呼びます。お母さんは、自分自身の顔を知っていますね。写真で見たり鏡で見たりして、よーく、知っています。どうした時に、どんな表情になっているかは、ほとんど知っています。今は笑顔を作って、笑顔をお母さんに与えているんです。ということは、どんな表情になっているか、ということもちゃんと知って、赤ちゃんに微笑みかけてらっしゃる。半ば無意識であっても、そんな顔しているとは夢にも思いませんでした、なんて言って、笑顔をお母さんに与える人なんていないでしょう。分かっているんですよ。だけど、生後1、2ヶ月の赤ちゃんは、自分の顔なんか見たことがないんです。まして、どうした時にどんな表情になっているかなんていうのは、全く分からない赤ちゃんが、なぜ、お母さんの笑顔に対して、首もすわる前の未成熟な時期に、お母さんの笑顔に、笑顔で答えるんでしょう。ワロンは大きな疑問を抱きます。好奇心を抱きます。関心を持ちます。天才的な学者、研究者って、こういう所が違うんだなあ、などと思います。私もね、自分の子供を3人も育てる中では、同じ事を経験してきたと思いますよ。1、2ヶ月だったか、3、4ヶ月になってからかは別として、私のような凡人は「あー、この子が笑っている。可愛いねー」でおしまいになります。ワロンは、「なぜだ？」って思うのです。私のような凡人だったら、「こっちが、笑ったからでしょ」で、おしまいであります。「自分は、この子に微笑みかけているんだってことが自覚が出来ている人と、そんな自覚なんか全くできない赤ちゃんが、微笑を交換できるのは、なぜだろう。」こころ辺りが、まあ、天才的な人との違いですね。道を通りかかったら、リンゴの木からリンゴが落ちてきました。「あー、リンゴが落ちた。

もらって、いただいてもいいかなあ？」これが私達の、私達と言っては失礼かもしれませんが、私の様な者の感覚です。ニュートンは、「なぜ、落ちたんだ？」と、こう言うわけでしょう。普通、なぜ、落ちたんだなんて思いませんよね。そこらじゅうの物が落ちてるんですから（笑）。落ちるのが当たり前と思っている。ニュートンは、なぜ、落ちるかという風に疑問を持ったから、万有引力を発見して、私にはそういう事は発見できない。これは比喩的なお話です。それでワロンに戻りますと、お母さんの微笑んでいる表情が、赤ちゃんに見えるんですよ。その微笑を通して、お母さんが抱いている感情を、感じ取る事ができる。生後1、2ヶ月でそれを感じ取る事ができるということが不思議で、生命体の凄さ、共鳴としか言い様がないわけです。で今度、その赤ちゃんが、生後2、3ヶ月になります。そうすると、お母さんにできるだけ、自分の側にいて欲しいと、こういう要求をする様になりますね。仕事、用足しの為に、ちょっと、その場を立ち去ろうとすると、泣いたり、怒ったりする。戻ってきてやると、また機嫌を直している。2、3ヶ月からこんなことが始まるでしょう。その赤ちゃんが3、4ヶ月になると、今度は側に居てくれるだけでは、気が済まなくなります。自分が喜ぶ事を、あれこれやって欲しいという要求をして来る様になります。一番単純に多いのは、抱っこでしょうか。3、4ヶ月になる頃から、だんだん抱っこして欲しい、窓の外を見せて欲しい、抱っこしながらそこを歩いて欲しい、お膝でトントンして欲しい、高い高いして欲しい・・・ああして欲しい、こうして欲しい、自分が喜ぶ事をあれこれして欲しい、こういう事になりますね。

私は、新横浜から倉敷に行きます。岡山駅まで毎週、新幹線で一往復します。今年で、とうとう10年目になりますが、新幹線の中で、いろんな人と乗り合わせします。時々、家内もやって来ます。「たまに行かないと部屋が汚れる」とか、確かに汚れているのであります。ゴミ出しの日に、間違っただけをしやしないか、チェックにやって参ります。有難い事です。それで、私一人だったら、なかなか、そういう勇気や感情が湧いて来ないんですが、家内っていうのは割合、お節介な人ですので、新幹線の中で泣いて泣いて、困っている幼い子がいて、お母さんも、ちょっと途方に暮れて、ああだ、こうだしてらっしゃると、余計なお節介をしに行くのであります、家内が。「お預かりしましょうか」という感じですね。よくもまあ、誘拐されると思わないで（笑）お渡しになる人がいるものだと思うのですが（笑）。それで、家内は新幹線の中を抱っこして歩いています。デッキに行くこともあります。デッキに居るなんて、私達はたまりませんね。指定席を買い損ねて、自由席が満席の時に、しかたなくデッキに居るなんて事はありますよ。でも赤ちゃんは、座席でしっかり抱っこされて、っていうよりも、デッキの方がいいらしいんですね。抱っこされているのが、いいのかもしれないですね。歩いてもらってるのが、いいのかも知れませんよね。まあ、私達とは要求が、気持ちが違うわけです。例えばそんな事をしながら、子供を何人が育ててきたコツがあるんでしょう、上手に扱ったりしています。そういう事が、ほんの何度かですけども、あります。まあ、預かる方も預かる方なら、預けられる人も預けられる人だなあなどと思いながら、私も時々、代わってやっています（笑）。手が痺れたり、疲れて来ますから一回だけですけれどね。途中で、お母さんがお降りになる時に、降りないって、グズった子が居るんです（笑）。一瞬、駅から降りる様にして、パッと渡して、サッと発車する前に乗りましたよ、私達は。あんな、ペテンにかける様な事をしちゃいけないなあと思いながらですね（笑）。PTSDになっていてくれない事を祈るばかりであります。

喜び、悲しみ、苦しみの分かち合い

子供っていうのは、自分の喜ぶ事をしてくれる人を求めるようになりますね。それが4、5ヶ月になると自分が喜ぶ事を単にしてくれるだけではなくて、更に喜ばしてくれる人を求める様になるんです。ぜいたくって言えば、ぜいたくであります。ああしてくれ、こうしてくれって、要求をしますよ。喜ばしてもらっていいじゃないかと思うかもしれませんが、そうではないんです。自分が喜ぶ事をしてくれる人も、一緒に喜んでいて欲しい。こんな事を、ワロンはしっかり気が付く。この観察の能力がワロンを有名にした所であります。人間は、自分に喜びを与えてくれる事を喜びにしてくれる人、喜びに思ってくれる人に育てられることが大切です。ストレスとか、不安を感じる人にはありません。「育児をする事を喜び、自分を喜ばしてくれる事を喜びにしてくれる。これが必要です。」とワロンは言いました。すごい発見ですよ、これは。本当にそう思います。なぜかって言いますと、ワロンはその後、ずっと観察していきますが、結局、喜びを分かち合いたいんです、子供は。自分一人で喜んでいればよかったのは、その前の段階です。「自分も嬉しいし、自分を喜ばせてくれる人、その人も喜んでいてくれる。喜びを分かち合いたいんです。ここで本格的な、人間としての共感的な感情の発達が始まる。」とワロンは指摘しました。人間の本当のコミュニケー

ションとは、そういう事でしょう。会話じゃありません、コミュニケーションです。人間らしい、人間としての情緒の発達は、こういう経験の基盤の上に成り立つでしょう。それからワロンは、ずっと沢山の事例を、それこそ大きくなるまで観察していくんですが、こういう事も指摘します。「他者と喜びを充分に分かち合った後でなければ、他者と悲しみ、苦しみ、苦痛、痛み、それらをかち合える様な人格は発達してきません。」この指摘はすごいですよね。私は、そういう事を知りません。「思いやりのある子になって欲しい。」と私たちは簡単に言います。でも、思いやりってというのは、他者の痛み、悲しみ、苦しみが、分かるって事でしょう。感じ取れるって事でしょう。人間であれば、誰もが感じ取れるんじゃないんですよね。感じ取れない人が沢山いるっていう事を、近年、ご理解なさるでしょう。「ただ、無性に人を殺したかった。」「ただ、無性に人を傷つける事が楽しかった。」ホームレスの人を苦しめたり、幼い子供を殺してしまったり、学校で、クラスメイトをいじめて喜んでいる。相手の、他者の悲しみを感じ取る感性が育てられていないんです。当然その前に、喜びをかち合ってくれる人に恵まれてもいないんです。ワロンの指摘は、まさにそういう事です。子供と一緒に喜んであげられますか？子供に喜びを与える力がありますか？子供だけ喜ばせていけば、いいんじゃないんです。子供だけを喜ばせてればいいっていうのは、おもちゃを買ってあげたり、お菓子を買ってあげたり、それだけでいいかもしれませんが、こちらと一緒に喜べる様な事をしてくださらないといけない。お風呂に入って、少しゆっくりくつろいで、じょうろやお船のおもちゃを持って入って遊んでいる。例えば、「この子が、こんな楽しそうにお風呂場で遊んでいる。見ているだけで、こっちも楽しく、嬉しくなってしまう。」「この子に絵本を読んで聞かせてあげる。本を読んで聞かせてあげると、こんなに嬉しそうだ。」「私の膝に居る事が、こんなにこの子にとっては喜びである。誇りである。それを与えている私にとっても喜びです。誇りです。」「この子は、あれを食べるのが好きなんです。この子がこんなに嬉しそうに、美味しい美味しいと言って食べる。それが嬉しいんです、こちらは。」ということです。

それぞれのご家族には、それぞれ一人一人の持ち味がありましようからね。特性や得意がありましようから、全ての事で、こうで、ああと申し上げているんじゃないんです。だけど、子供に喜びを与えてあげる事が、自分の喜びですか？そういう体験が、日々沢山ありますか？こういう事が大切です。「この子は、こうして欲しい、と言うんです。してあげると喜ぶ。だから、仕方がないから、してあげないと怒るから、泣いたりするから、仕方がない、面倒だけどしてあげる。」っていうのは、ダメなんです。充分じゃないんです。他者と喜びを、悲しみを分かち合えるような人格が育ててこないんです。親が年老いて、人の助けがなければ生きていく事ができない。こういう事をイメージしてみてください。その時あなたは、どんな事をしてでも、自分の両親を、助けようと思えますか？という時に、他者の悲しみ、痛み、苦しみ、こういう風な事を分かち合える様な、感情、人格とでも言いましようか、それを育てておかなければ、できるはずがない訳ですね。日本の学校は、悲しいですけども、世界一教室でイジメが深刻だと言われます。イジメがあった場合に、イジメをとめようとする生徒も世界一少ない。日本の小、中学校です。大阪市立大学の森田先生、高名な先生がいくつもの国の協力を得てお調べになって、そういう事がわかっています。悲しい残念な事ですけど、日本の生徒だけが、学年が上がっていくに連れてイジメを止めようとする意欲を持つ生徒が減ってしまうのです。日本を除く全ての国において、小学校、中学校は、年齢、学齢が大きくなるに連れて、「自分のクラスに仮にイジメがあっても、それを止めさせようとする努力をする。」という生徒の比率は上がっていくんです。日本だけが唯一、減ってしまう国なんです。もう少し私達は、自分の生きがいとでもいいましようか、自分のやりたい事を優先するのではなくて、この子が私に何を求めているかを考えることが、親であれ、地域社会の人であれ、先生であれ、大切な事だと思っているんです。私達は、そういう事をする力が、もしかしたら、世界一衰えた国民になっているかもしれません。その代償として、世界一の長寿が与えられているかもしれない。あるいは、世界一の長寿が与えられているっていう事は、こういう負の部分も背負いながら、生きなければいけないっていうことになるのかもしれない。難しい事です。でも子供は、いろんな人の手の中で育てられる事が、とても大切な事です。その事は、再認識していただきたいと思えます。お母さんが育児にストレスを感じたり、育児が嫌だからと言っているから、育児を代行するということじゃないんです。子供ってというのは、いろんな人の手によって、いろんな人の微妙に異なる愛情によって、思いやりによって、育てられなければいけないんです。とても重要な事です。

例えば、親の愛情と、祖父母の愛情を比べてご覧になると、こうも違うかっていう程、違います。違って、しかもそれがどちらも大切です。私自身は、自分自身が、私の父親の両親、祖父母ですが、と一緒に生活をしながら、自分の目の前で、中学が終わる頃までに、おじいさんも、おばあさんも亡くなっていく、そういう経験をしてきまし

た。ですから、子供が育つ為に、祖父母の存在の意味は大きいという事を私なりに理解してきましたから、私は、私の両親を我が家に招きました。そして、三世代で生きてきました。やってみて、しみじみわかりました。私の両親がごぞいますから、私達子供に対して、どんな態度で育児をしてきたかは、もう重々承知であります。その両親がですね、孫が産まれてみたら、私達にとった態度からは似ても似つかない態度で接しますから（笑）ビックリしました。「ああ、こういうものなんだ、祖父母は。」と思いました。子供を産んだ親が、いろんな事情でいなくなってしまったから、育児の全責任の様なものを祖父母が請け負うっていう場合と、親が居る所で、祖父母も参加するっていう様な場合では、多分違うんだろうと思います。違うと思いますけども、まあ、こんなに違うんだってことを思いました。様々な事がありますが、集約して申し上げますと、これも、いろんなご家庭で、あるいはいろんな祖父母で、親で、いろんな違いが、個人差があると思いますが、一般論としては、こういうものだと思います。親は、我が子の将来を幸せにしたい。子供の将来に、夢や希望や期待を抱きたい。わざわざそういう言い方をしなくても、子供の将来を幸福にしたいと願っています。ところが、祖父母はですね、孫の現在を幸せにしたいと思っていますよ。親よりは、遥かに大きく、孫の現在を幸せにしてやりたいと思っています。どちらも、かけがえもなく大切だっというのを皆さん、ご認識下さい。親以上に、子供の将来の事を考えてくれる人は、めったに居ません。ほとんどいないって言うのもいいと思います。だけど、将来の幸せっというのを、現在の不幸と引き換えにする人がいます。「あなたは、将来幸せになる為に、今、この苦しみを乗り越えなさい」という発想で、育児をする事がありますね。それは、何も悪い事ではないんです。親の愛情です。「頑張るんだよ。」「このぐらゐの事でめげちゃだめだよ。」ということです。ですけどですね、子供は幼い時ほど、現在が幸せでなかったら、将来に幸せな夢や希望を抱く事はできませんよ。そういう事ができる様になるのは、小学校の高学年、中学っていう風になってからですよ。「今のこの苦しみは、将来の喜びの為です」っというふうな意味合いの現在の頑張りは、親はそう思っているけども、小さい子供はそういう風には思えません。「昨日、面白かった！」「今日も、又楽しかった！」「だから、明日もまた、いい日が来る！」こういう風な感覚ですよ。子供っというのはね、皆さんも小さい時のことを、どうぞ思い出してみてください。これが将来の為になると思って、ピアノのお稽古なさったなんて人いますか。親はそう思っていたかも知れませんが、勉強にしろ、何にしろ、そうなんです。でも子ども自身は、今楽しくなかったら、将来への夢や希望っというものをつないでいく事はできないんです。一旦切れてしまった人を再点火する事がいかに大変かっていう事は、精神科の医師や心理学者は嫌って言うほど、知っていると思います。不可能とは申しませんが困難は困難です。親が時として、そういう間違いを起しそうな所を、祖父母が修正したり、補ったりしてくれます。今の幸福です。分かり易いですね。

多様な愛情の形の中で

我が家での例を申し上げますとね、もう子供はみんな、30代前後です。34歳、32歳、29歳っというふうになりましたが、遠い昔の話を思い出します。育ち盛りの幼稚園、小学校のごく低学年の頃にあった、何回ものエピソードです。いつもの時間に、母親が夕食を用意するのが間に合わない、っという事があります。ご近所で急に用事があって、夕食の準備が遅れて、「今、一生懸命作っているから、待ってなさい。」「もうちょっとだから、我慢しなさい。」「お腹がすいたー！腹減ったー！」子供は、もう母親にせがみ続けます。「もうちょっと、待ってなさい。」「ちょっとって、どれだけよ？」って、子供が言ったりする。「ちょっとは、ちょっとでしょ！」なんて、言ったりしてですね、「もう、ちょっと過ぎた！」って、また言うてる訳ですね。「じゃあ、もう少し待ってなさい！」「少しって、どれだけよ？」「少しは、少しですよ！」「もう、少しの時間、終わったよ！」とか言う訳です。母親もイライラしてくる。子供も空腹に耐えられない。成長期、育ち盛りの子供の空腹とですね、もう大人になって成長が止まってしまった人間の空腹とは程度が違いますよね、空腹の程度が。私たちは忘れてしまっています、どんなにこの子は、お腹が空いて大変かっていう事を。「私だっって、お腹が空いているんですよ！」なんて程度のものではないんですけれども、そんな事、思いながら食卓の用意をしません。「もうちょっとだから我慢しなさい！」って言ったりする。「僕、もうこれ以上待たされたら、死んじゃう！」なんて、子どもはこういう事を言うんですよ。母親も、多少イラだっけると、「どうぞ、死んで下さい！」なんて（笑）。もう、そうすると、それ以上ねだれない。仕方がないから、子供は祖父母の部屋へ言い付けに行く、逃げていく。祖父母は隣の部屋で、台所で何が起きているか、どんな会話が進んでいるか、よく知っている訳です。「何が起きたんだね？どうしたんだね？」と、泣きべそかきながら逃げて来る孫を祖父母が迎える。

「ママはね、僕にご飯をくれない。」って言っちゃう(笑)。「ママはね、僕の事、死んでもいいって言っている。」(笑)と、こういう風な言い方をしている。祖父母は、そんな単純な事を丸々信じる訳じゃないんですが、だけど、こう言ってくれる。「そりゃ大変だ。あんたが死んじやったらね、おじいちゃんも、おばあちゃんも、もう、生きていたくはありませんよ。」まるで殉死するみたいですよ(笑)。昔の天皇陛下が亡くなるみたいな。祖父母にしてみりゃ、そうでしょう。「そりゃたいへんだね。ここにカステラがあるから、おあがり」とこうなんです。そうすると、子どもは急にニコニコしてカステラを食べ始める。祖父母はそれを見ているだけで、嬉しくなる。カステラをあげたおじいちゃんも嬉しいし、脇で見ているおばあちゃんも、また孫が可愛くなっちゃう。「こちらには、おせんべいがありますよ」(笑)と続きます。隣の部屋で、母親は一生懸命食事を作っている。その隣で、カステラとおせんべいを食べさせている。15分、20分したら、食事が始まりました。当然、その子は、食べられません。当たり前で、親も何も言う事ないんです。それでいいんです。「ご飯の前に、あんた、カステラなんか、いただいて食べたから、ご飯食べられないでしょ！」こんな、バカな事は言う必要はないんです。本人が重々知っている事でありますから。そうでしょう。適切な育児、教育っていうものは、本人が分かっている事は言わないという事なんです。こっこの気が済まないから言っている事は、マイナスにしかありません。この事は言っといてあげないと、この子は気が付かないからっていうような事は、言っておさなければいけません。ですが、重々に分かって、多少は後悔しているかもしれません。後悔していると言ったって、どうせ、我慢できなかったんですけどね。次に、こういう事があつたら、ちょっと我慢してみようと思います。同じ様な事があつても、我慢出来なくなると、「おじいちゃん、何か美味しい物ない？」ってこう言いに行きます。まあ、おじいさん、おばあさんは、よくしたものです。「おじいちゃん、おばあちゃん、何か美味しい物ない?」「家にはまずい物なんか、ありませんよ!」(笑)また、美味しい物をくれる。で、その度に「ああしまった。皆と一緒にご飯が食べられない。止めておけばよかった」という気持ちになります。何度かそういう事を経ているうちに、我慢できる子がでてきます。これがいいんですよと、私は本当に思います。祖父母っていうのはですね、現在を幸せにしてくれるんですよ。親は将来を幸せにしたいと思っているんです。どちらも大切な事です。どちらも大切に、しかも一人が両方を与えるって事は、非常に困難でしょうね。不可能に近い事かもしれません。例えば、親はチョコレートのおやつを与えます。神経質なお母さんは「チョコレート食べた後は歯を磨いておきなさい」と、こう言ってあげるかもしれません。明日の虫歯を心配してやっている訳です。だけど子供からすれば、チョコレート食べる度に歯磨きなんかさせられるんじゃ、徐々に、もうチョコレート食べたくないっていう気持ちが大きくなるでしょう。そこいくと、お隣のおばさんからいただくチョコレートは、美味しいんです。「歯を磨け」って言いません(笑)。隣の子供の虫歯は、どうでもいいとは思いませんけどね(笑)。心配はしないです。我が子には歯を磨かせていても、隣の子供には「磨け!」と言わない。このチョコレートの味が何とも言えない。ところが、何日か後に、仮に虫歯になっても、「隣のおばさんが、僕を虫歯にした」とは、思いません。ただ、虫歯になったっていうだけであります。

こういう様々な人の様々な愛情の意味を皆さん、しっかりお感じとりいただく。その為の地域社会でしょ。おじいちゃん、おばあちゃん、お隣のおばさん、お向かいのおじいさん。学校の先生、様々な先生、みんな価値があるんです。給食の時に、偏食の指導を厳しくする先生、一方、好きな物だけを美味しくいただくのが食事だ、とこう言ってくださる先生。毎日しっかり宿題を出す先生、放課後の時間は君達の時間だから自由に使いなさい、と言って下さる先生。みんな、それぞれ価値があるんです。こっちが好きだ、あっちが嫌いだっていう事が仮にあつても、それぞれに価値があるんです。で、その時に、あっちが好きで、こっちが嫌いだ、っていうのを親だけで判断しすぎたら、多分ダメでしょうね。そんなに宿題がお好きなら、ご自分がなされればいいですよ。お料理の宿題とか、お掃除の宿題を毎日するっていう事じゃありませんか。子供はいろんな人の愛情の中で育てられます。大切な事は自分を好きになれる子供に、自己肯定感がしっかり出来る子供に、自尊心、自尊感情、自分を信じる事が出来る様な子供に、お育ていただく事です。それは、その子を肯定してやる事です。私達親も、自分の子供に自己肯定感を与える様な気持ちを持ちながら育てたと思いますが、祖父母はですね、そんな風な意図、企みていますか、そんなものを持たないで自然に与えます。私はね、何度も聞かされたんです、家内から。「うちのおじいちゃんはね、孫の顔さえ見れば、あんたは、よく、うちに産まれて来てくれたね。」こういう事、言っているって言うんです。なるほど、親にはなかなか言えない言葉ですよ。「こんな事が良く出来る様になってくれたね。」とは言いたいんですけど、産まれて来ただけで、よく無事に産まれて来てくれたという風な事を、よく、祖父母が、特に祖父のほう、私の子供には折に触れて言って

いたそうであります。幼稚園頃の小さい時ですよ。子供は言われている事の意味を非常に具体的には分からないと思いますね。だけど、愛されている、大事にされてるんだ、って言うぐらいの意味はしっかり通じるでしょう。こういうものが、子供に自己肯定感を与える訳です。ところがしばしば、親が我が子に自己肯定感を与えるのが、一番下手だっている場合があります。「こうならなくちゃダメだよ。」と、こう言うんです。「こうしてくれなくちゃダメですよ。」と言いたい事があります。その場合に、子供に伝わるメッセージは、「ダメですよ」って所が伝わる訳です。「そんな事できなくたって、いいんだよ」って、子どもにはこういう風に言って下さる方もみえますが、そうすると、怠け者になると思ってしまう。そんな事はないです。全くありません。空腹になれば、祖父母の部屋へ逃げていってどうするか。そんなだらしのない子に、いつまでもなっているのではないんですよ。私の両親、子供の祖父母は、孫を一度も叱った事がないと思います。孫の要求を一度も「ダメ」だと言った事もないと思いますね。それぞれの子供が小学校、中学校となるプロセスの中で、祖父母は亡くなっていきました。子供達の目の前で、亡くなっていきました。病院に入ったり出たりもしましたけど、父が亡くなった時も、母が亡くなった時もですね、それぞれ子供達に聞いてみたんです。「あんた達は、おじいちゃんから叱られた事あるかね？」どの子も「一度もない」と、こう言いました。「おばあちゃんから叱られた事があるかね？」聞いてみました。「一度もない」と、こう言いました。父の死、祖父の死の方が最初でしたから、火葬場でお骨になって出てきた時、やはり子どもたちは呆然としていました。初めての経験ですからね。その時、ふっと我に返らせてやろうと思って、「あんた達は、このおじいちゃんに叱られた事があるか？」って聞いてみたら、「ないと思う」って、どの子も言いました。母の時はまだ、遺体の状態のときに、そういう事を聞いてやったんです。「一度もない」と、こう言いました。そうだったろう、と思います。この両親に私は教えられた事があります。

祖父母が晩年、それぞれ衰えて亡くなって行く訳ですが、晩年になると孫にあれこれしてやるなんて事は、何も出来なくなります。それどころではないです。孫の手を借りたい、肩を借りたい、誰かに助けられながら生きていくって事になりますね。私の子供は、私達が上手にしつめたとか全く思ってないですが、祖父母の願いを嫌だと言った子、そういう情景を家内は一度も見ただ事がないと言いました。「お手洗に行きたいんだ、ちょっと手を貸しておくれ。」「肩を貸しておくれ。」「おじいちゃんは、あのお菓子をちょっと食べたいと思う。買ってきてくれないかね？」こんな風な事を祖父母は孫に頼ったと、家内がよく言いました。私達夫婦と、子供達が居る時では、ほとんどの場合、孫の方に頼んでいました。気持ちが楽なんですよ。そうかあ」と思いました。家内はその事を実感していました。ですから時々ね、「これは大切な事ですから、おじいちゃんから頼んでもらいましょ」なんて、こんな事言っている事がありましたよ（笑）。おじいちゃんから頼まれた事は、嫌だって言わないんです。何をしても、ゲームをしていても、どんな楽しい事をしてようが、「待っていて」「後で」とか、「これ終わってから」とか、「嫌だ」とかって言った事が一度もないんです。教えられましたよ。理屈は簡単です。祖父母が、一度もダメだと言わなかったからです。だけど、親には出来ないんですよ、こんな事。そうでしょ。食事を作ってあげながら、「お腹空いたんなら、そこのお菓子食べときな。」とは親は言わないんです。親と祖父母では、愛情の種類が違うんです。親はこれを食べさせたんです、今作っている物を。そうでしょ、それが親の愛情です。そして子供はですね、祖父母のところに逃げて行って、カステラをもらって良かった、ホッとした。後になってみたら、ご飯が、皆と一緒に食べられないから残念だったと、こういう一連の経験をする中で、祖父母が愛情豊で、お母さんが愛情が乏しかったなんて絶対思わない訳であります。親の愛情、親の気遣い、心遣いはこういうもの、おじいちゃん、おばあちゃんをああいうもの、子どもって、こんな風に思うんですよ。どちらが、意地悪とか、親切とかね、そういう話じゃないんです。だけど、この両者を親だけでやるなんてことは出来ません。

叱らないほうが通じることがある

時間が参りましたから、最後にほんの一言申しますが、親だけで子供を育てちゃダメですよ。だけどそれは、親が育児が嫌だから、面倒だから、誰かに手伝ってもらうのではないんです。子育て支援、育児支援、ある意味ではとても大切な事です。私は、支援なんて言う言葉はあまり好きではなくて、協力がいいと思いますけど、それは子育てを代行する事ではないんです。それでは施設と変わりません。親だけで育児をするんじゃないんです。親の愛情は、誰も代わってやる事ができない様なものです。だけど一方で、親にはやってあげられない愛情があるでしょ、沢山。私

の両親、子供にとっての祖父母も親が居るからそういう愛情の与え方が出来たんだと思います。子供だけ残して、私達が行方不明になったとか、死んだとかって事があって、この孫を自分達が育てなくてはならないとなったら、食前にカステラを与えるような育て方をしたかどうかは分かりません。そういう事ですよ。みんなが持ち味を、役割を、いい意味で分担し合って協力し合って育てなくちゃいけない訳です。子供が仲間との関係の中で育つという部分を親なんか絶対に代わることが出来ませんから。どんなに、海水浴や動物園にお連れになったって、それで子供が仲間と遊んでいる様な経験を代行するなんて、絶対できないですよ。むしろ、そういうやり方では、いけないんです。そういう意味で、子供は親だけで育てちゃいけないんです。親だけで育てすぎてはいけません。そして、育児が面倒だから、嫌だから、苦痛だから誰かに手伝ってもらおうという発想もいけないと思います。「私には出来ない事をこの人ならして下さい。」「私に与えられないものを、あの人がやって与えて下さっている。だけど、これは、私にしかなできない。」「この事は、私がやるんだ。」と、こういう調和をお考えいただきたいと思いますね。基本的に申し上げたらね、「叱らない」ようにして下さい。好き放題させるって事じゃないんです。「こんな事、やっちゃダメでしょ。」「こうしなくちゃ、いけない。」というようなことは、折に触れて言っていただく。ただ、カッカして、叱りながら言うんではないんです。基本的には、「こうするんですよ」「こうしちゃ、ダメなんですよ」っていう事はもちろん、躰や教育の中で、文化を伝える中で、大切な事です。ですが、もしかしてですね、毎日怒らないではいけない人がこの中においでになったら、一週間で結構ですから、一度も叱らないでみて下さい。「こうするんですよ」「こんな事しちゃ、ダメですよ」「いつも、ママが言っているでしょ」「お父さんがこう言っているでしょ」これは、お伝え下さっていいです。ただし穏やかに、ですよ。必要なだけ繰り返して。一度も叱らないで、一週間だけ経過を見て下さい。お子さんがどれだけ生き生きとして、良い子になってくるか、分かりますから。叱らないでも、良い子にだんだん来ますよ。叱ってらっしゃる間は、叱らないとダメな子なんです。あえて申しますと、叱ってもダメな子なんです(笑)。そうでしょ。お分かりになるでしょ。ピーンとくるでしょ。叱らないでお育てになると、叱らないでもいい子になるんです。子どもに好き放題させるなんて事を申し上げているんじゃ全くありません。私がね、自分の子供の子育てを理想的にうまくやって、悔いがないとか、間違いないなんて、そんな事は微塵も思いません。いろいろ、あります。だけどですね、子どもが母親にこんな事を言ったそうです。大体、18、19の頃のように。「パパは絶対叱らないね。怒らないね。何でもいう事を聞いてくれるね。」って。母親は、家内はそれを黙って聞いている。「ああ、そうかもしれないね。」って言って。「だけど結局は、パパの思い通りに育てられちゃった様な気がするんだ。」って、こう言った子供が一人いるんです。叱らなくても、多分通じるものがあると思います。叱らない方が通じるとさえ思います。別の子は・・・自動車の運転免許は18から取れるんですか?・・・とって来たんです。母親に見せびらかしながら、とっても嬉しそうで、「免許が取れた」と言っている。「うちのパパは何でも言う事を聞いてくれるでしょ。」何が言いたいんだろうと思っていると、「自動車買ってよって言ったら、買ってくれるよね。あのパパは。」と、こう言ったと言うんです。「ドキッとしましたよ」と、家内はこぼしていました(笑)。だけど続けて、「自動車なんてものは、自分で働いて、大きくなって自分で働いて買うもんだよね。」と言ったそうで「ホッとしましたよ。」と(笑)。「だけど、パパが車を使わない時だったらね、パパの車を借りてもいいよね。」と。家内はすっかり安心して、「うちのパパはね、今日は車を使いたいなあと考えていても、あんたが先に今日空いている?て聞いたら、大体の場合、空いているとってくれる様なパパだよ。」(笑)と、言ってやったそうです。

要するに何が申したいかって言うと、叱るのは、自分の気持ちを静める為に叱っているんですよ。その分、子供の気持ちは静まりません。それに、叱ったから子どもの躰が良く行き届いている訳ではないんですよ。いいですか?一週間でいいですから、一度も叱らないでみて下さい。その優しさには強さが必要です。自分に対する強さです、ある意味では。そんな事を、ちょっとご案内申し上げておきたいと、こう思います。いただいた時間が、ちょうど終わりました。ありがとうございました。

<質疑応答>

Q 始めまして、と言いますか、始めましてではありません。私は、佐々木先生に3回、お目にかかっています。先生の話が聞きたくて、今日もやって参りました。先生のお話、本も沢山読ませていただき、私の子育てに多大な影響を与えていただいています。子育てというのは、とても大事な事だと、日々痛感しています。こんな大事な事であ

ることを、私は本を読んだり、先生のお話を聞いたりして気がつきました。親が大事だって思っている事が、方向が違って、私も実は違った方向を向いて子育てしていたんですけれども、佐々木先生の本に出会って、間違っていたという事に気が付いた一人です。きっと、一生懸命、子育てされているお母さん方の中には、これで、間違っていないと思っていて、私の様に違う方向へ向っている方が沢山いらっしゃると思うんですけども、そういう時代の流れを、佐々木先生のほうへ戻す様な世の中にするには、一体、私達に出来る事と言いますか、どうしたら、そういう子育てが出来る様になるかということをお教え下さい。

A なるほど、それは一言で言えば、お母さんだけより、おじいさん、おばあさんも、両家に4人、双方いらっしゃるでしょ。そういう、おじいさん、おばあさんの協力を得る事。あるいは、ご近所の人の協力を得ること。その為には、自分も、ご近所の子供も育てる気持ちをもつこと。この関係をいきなり、むやみと沢山広げるといふ事が出来にくかったら、ゆっくりでいいですから、進めて行かれれば、いいでしょう。そうするとね、親がやっている事は、単純に、一概に、全面的に間違っているとか、正しいという事ではなくて、不足があるんですよね。不足の部分为解决するために関係を広げるのだと思いますね。よく見てらっしゃると、親の所より、おじいちゃん、おばあちゃんの方に余計に行きたがる、という事が、もし子供に見えたら、これはいけないって思っておさなければいいですよ。例えばですね、おじいちゃん、おばあちゃんの方が、居心地がいいんだという様な、単純に居心地がいい所にさえ置いておけばいいという意味でもないんです。でも、その事の意味は大きいですね。ですからね、自分だけで大きな影響を子供に与えすぎてしまうと、修正できない。それから、お父さん、お母さん、特に若いお父さん、お母さんが、ご自分を修正しにくいって事があるでしょう、簡単には。だから、他の人の手をお借りになると。

それから、もう一つ申しますと、自分の子供を連れて遊園地にいらっしゃるとか、動物園にいらっしゃるとか、いろんな遊びをされる時に、できれば何家族かでいらっしゃれば、本当はいいんですけど、いきなり実行するのは難しかったら、親しい人のお子さんを借りて行くといいですよ。私はそういう事も、割合しました。そうするとね、親とだけで行っている時と、よその子供も一緒のときと・・・時にはいとこの子ともあります。私の甥や姪ですね・・・そういう人も一緒に来た時とでは、子供の振る舞いがこんなに違うんだっていうのが、親の目で分かりますよ。動物園でも、遊園地でもですね。友達も一緒に行くんです。小学校、中学になりましたら、私はね、よくナイターの見物なんかも近所の友達を連れて行きました。そうすると、ナイター観戦一つにしても、小さい時、動物園の中を歩くにしても、親とだけ行っている時っていうのは、こんなに親に束縛されたまま動いているんだっていうのが分かりますよ。友達と一緒にいくと、勝手に友達と動き回っています。親と一緒に見に来る時は、割合、静かに見ていますけど、友達が居ると、ヤジったりしながら見てます。「○○を出せー！」とかなんか、言ってね。監督みたいな気持ちになって。へえーなんて、我が子を思います。ああ、親とだけだと、こんなに親の感情の中だけで束縛されているんだなあ、分かったりなんかします。この様に、いろんな人のお手をお借りになると、自分だけで育てる事との違いが、こんなにあるって事がお分かりになるから、そんな事をお勧めしてみたいと思いますね。どうでしょう。一つの小さな例ですね。私だってですね、今お母さんが「ああ、自分の子育ての方向が少し間違っていたかもしれない」といふ事があったという風にお話して下さいましたが、私達でも、あるんです。私自身でも、いろんな人から、学んだり、先人の優れた研究を学んだり、家内からね、ほんの何度かですが、「そんな事、もう少し早く言って欲しかった。」なんて言われる事があります。だけどその時、私自身も、まだ気が付いてなかったり、分からなかったり、その頃には、この優れた研究者の研究報告に、まだ出会ってなかったりする訳です。また、どんな優れた研究者の業績も、私はね、自分の臨床実践の中で確認した事だけを申し上げていて、ただ、ある研究者がこう言った、ああ言ったって事を、鵜呑みでお話している事は何一つないです。自分で確認すると、「こうだ！」っていうように思えて、皆さんにご案内したりね、家族に伝えたりするといふ事してきました。誰でもね、やり直しがきくんだったら、あの時のあれをと、この時のこれをといふのは、いくつか、おありになるんじゃないでしょうか。我が家も全く同じ事ではありますが。そこから、又、いい事を進めて行かれたらいいと、こう思いますかね。

Q すごく為になるお話を、ありがとうございました。子供が同年齢の子供よりは、かなり成長が遅れていまして。小学校1年生なのですが、お友達と遊ぶ事はすごく大事だと思うんですけど、うまく遊べなかったり、そういう所が

あるんですね。私もそれを心配したのですが、やっぱり、家で遊ぶってなると、自分の好きなビデオやパソコンばかりしちゃうんですね。だから、出来るだけ外に出そうと、お稽古事を割りとさせています。妹とはすごくコミュニケーションとれて、遊べるんですけど、お友達と約束っていうのはすごく難しいので、そういう子はどうでしょう？

A 発達が少し遅れているとおっしゃいました。あるいは、ズレるとでもいいでしょうか、違うとおっしゃいましたね。その時、例えば、広汎性発達障害とか、自閉症とかいわれる様なタイプの発達の障害でいらっしゃる場合と、単純に知的発達の遅れでいらっしゃる場合と意味が違いますけど、基本的には、お子さんはですね、楽しくない所へ、これが大切だから、やりなさい、行きなさいと言っても、ダメなんですね。遊びもそうですよね。こちらが、用意してあげて、「○○ちゃん、○○ちゃんと、この人達と遊ぶと楽しいはずだから、一緒に遊びなさい」は、ダメです。楽しくなければ、意味はないですね。意味がないどころか、逆効果かもしれませんから。で、広汎性発達障害と言われる様なタイプに属される発達のズレとか、遅れがある人だったら、ある意味では、お稽古事だけではないんですけど、パターンが決まっているというか、法則が決まっているというか、予測したとおりに基本的な事が進んでいくとか、そういう中で身に付けて行かれるものが大きいんです。ですから、それをある程度中心に、日々の生活をなさる事は、その子にとっては大きな弊害ではない、それどころか良いと思っております。けれども、妹さんとは遊べます。自分の家では遊べるとしたら、妹さんのお友達、それから、ご自分のクラスメートやお友達でも、ご近所の友達でもいいんですが、「遊びに来て下さい」と、こういう風にお願ひになるのが、いいと思っております。来てもらえばいいんです。それから、毎日、そうでなければならぬとは思いませんから、もしお母さんに、ご自分の甥子さん姪さんがいらっしゃるって、今度の休日に、こんなところに一緒に行きませんかと、お誘ひになってみてもいいですね。そういうのも、いいと思いますよ。だんだん、いろんな人との関係を広げていく訳です。楽しくない交わりは意味がありません、というより、もしかするとマイナスかもしれません。ですから、今の事で充分、ご本人は喜びを持って、と言いますか、気持ちの安定感をもって、日々の生活を繰り返してらっしゃるというのなら、基本的にはそれがいいと思います。特に発達障害、いろんな程度に、いろんなズレを持ってらっしゃる場合には、いい意味でスケジュール決まっている方がいい訳です。決して、私はパターンというのは好きではありませんが、パターンが決まっている方がいいんです。日課、習慣がしっかり確立されている方が、「デイリー」、毎日のスケジュールにしる、「ウィークリー」、何曜日はどうですよっていう事も含めて、安定される発達障害のタイプの方はおいでになりますから。その面については、ご当地にはね、愛知県には専門家がたくさんおいでになりますから、ちょっとご相談なされればいいと思います。私が今、お話を伺った範囲内では、そんな事思います。